

郷土の文化財25

荒神塚古墳

平成15・16年度国補緊急地方道路整備(街路)事業に伴う荒神塚古墳発掘調査報告書



2005年(平成17年)3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

郷土の文化財25

荒神塚古墳

平成15・16年度国補緊急地方道路整備(街路)事業に伴う荒神塚古墳発掘調査報告書

2005年(平成17年)3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成15・16年度荒神塚古墳発掘調査の報告書である。
2. 事業は、諏訪建設事務所より発掘調査の依頼を受けた岡谷市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成15年12月1日から平成16年3月10日まで行われた。平成16年度に整理作業を行い報告書の発刊に至る。
4. 出土遺物、記録図面、写真などの資料は岡谷市教育委員会が保管している。
5. 調査および遺物整理は、山田武文を中心に、林順子、上原留津子、小林謙一、山崎めぐみ、佐藤美枝子、会田進、小坂英男が行った。
6. 調査成果の概要をI-1にまとめた。報告書作成の規範、執筆は調査の概要の中に記した。
土器および古錢の分類鑑定は、茅野市教育委員会柳川英司氏にご教示頂いた。

序

このたび「荒神塚古墳発掘調査報告書」を刊行することになりました。

市内には200箇所を越える遺跡が点在していますが、古墳は26基を数えます。本年度は、長地の山麓において古墳の新発見があり、未だ知られざる歴史が埋もれていたことに驚きを覚えます。

荒神塚古墳は、明治14年に調査記録が残されて、遺物の多さや内容に注目されてきた古墳であります。しかし昭和9年の県道拡幅工事により石室の大部分を取り除かれてしまうという災難に遭遇していますが、生活の向上と遺跡の保護は常に私達に突きつけられた課題であります。

今回の調査においては、墳丘の痕跡を認めたにすぎませんが、例えわずかでも何かしら残されたものに史料的価値は存在しています。失われたものは多くとも、残された少ない中にも当時の人々の息吹を感じができるものと思います。川岸地区では、昭和26年に川岸村誌が刊行されていますが、こういった地域誌に关心を寄せていただいたことに敬意を表するものであります。

本書におきましては、荒神塚古墳について今までの認識を再確認するとともに、最近の成果を取り入れる中で、この古墳の持つ意味を改めて考え直しています。それが岡谷市の歴史に新たな1ページを開いていくことができればと願っております。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対しまして深い理解とご協力を頂きました調査建設事務所、地元三沢区の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成17年3月

岡谷市教育委員会

教育長 北澤 和男



長野県における道跡の位置図

目 次

序	
例 言	
1 発 挖 調 査	1
1. 調査の経過と概要	1
(1)発掘調査に至る経過	1
(2)発掘調査及び出土品整理、報告書作成組織	1
(3)調査の概要	1
2. 遺跡の位置と環境	5
3. 古文書にみられる藤島神社(荒神塚古墳)	6
4. 荒神塚古墳の調査史	8
(1)明治14年の調査	8
(2)出土した遺物	9
(3)県道拡幅工事と石室の除去	12
(4)川岸村誌編纂の調査	12
(5)岡谷市史の編纂と調査	12
(6)遺物の保存強化処理	12
5. 平成15年度トレンチ調査および主体区調査	13
(1) 1トレンチおよび主体調査区(本区)の調査	13
(2)本区南壁(天竜川側)および西壁(辰野側)土層堆積状態	17
(3)本区北壁(県道側)土層堆積状態	18
(4)骨の入った甕の出土状況について	19
(5)3・5トレンチの調査	20
(6)6トレンチの調査	20
(7)6トレンチ東壁土層堆積状態	21
6. ま と め	24
付 表	
報告書抄録	

挿 図 目 次

長野県における遺跡の位置図

第1図 荒神塚古墳の位置(○印 1:50000)	2
第2図 荒神塚周辺の遺跡(1:12000)	4
第3図 市内古墳分布位置図(1:20000)	5
第4図 荒神塚古墳 絵図(明治初年)	8
第5図 荒神塚古墳 トレンチ設定図(1:100)	14
第6図 荒神塚古墳 掘乱穴実測図(1:100)	15
第7図 荒神塚古墳 本区南壁および西壁セクション図(1:40)	16
第8図 骨の入った甕出土状態実測図(1:10)	17
第9図 荒神塚古墳 本区完堀実測図(1:100)	18
第10図 荒神塚古墳 本区北壁セクション図、埴丘想定図(1:80)	19
第11図 荒神塚古墳 3・5トレンチ セクション図(1:40)	20
第12図 荒神塚古墳 6トレンチ 東壁セクション図(1:40)	21
第13図 荒神塚古墳 エレベーション図(1:200)	22
第14図 荒神塚古墳 出土遺物実測図	23

I 発掘調査

1. 調査の経過と概要

(1) 発掘調査に至る経過

- 平成10年7月27日 県道下諏訪辰野線改良工事と係る荒神塚古墳の保護について協議
平成15年11月4日 長野県教育委員会へ「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」を提出
12月1日 諏訪建設事務所と埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結 発掘調査に着手
平成16年3月10日 発掘調査現場作業終了
4月12日 長野県教育委員会へ「発掘調査終了報告書」、岡谷警察署へ「埋蔵物発見届」を提出
出土品整理を行い、発掘調査報告書作成に着手
11月1日 埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結
平成17年3月15日 報告書発刊

(2) 発掘調査及び出土品整理、報告書作成組織

事務局	北澤 和男 (教育長)	矢島 敏夫 (教育部長)	横内 哲夫 (生涯学習企画課長)		
	会田 進 (副参事)	小坂 英文 (主任)	野中ゆかり (指導主事)		
	小口 幸 (事務員)				
調査員	山田 武文	上原留津子	小林 謙一		
作業従事者	宮沢 辰春	高橋 公夫	安倍 史裕	桃沢 良三	新美 浜夫
	茂野 健治	鮎沢 勝一	松田 尊行	今井 敏男	小口 吉重
	小島 利彦	奥石 広	山田 和子	丸山ゆき子	小林久仁江
整理協力者	柳川 英司				

(3) 調査の概要

- | | |
|----------|----------------------------------|
| ①事業名 | 平成15・16年度国補緊急地方道路整備(街路)埋蔵文化財発掘調査 |
| ②発掘調査主体者 | 岡谷市教育委員会 |
| ③遺跡名 | 荒神塚古墳(岡谷市遺跡地図No.31) |
| ④遺跡の所在地 | 岡谷市川岸上一丁目1番(三沢区) |
| ⑤調査の目的 | 県道拡幅に伴う当該古墳の記録保存 |
| ⑥発掘調査期間 | 平成15年12月1日～平成16年3月10日 |
| ⑦遺物整理期間 | 平成16年11月1日～平成17年3月15日 |
| ⑧調査面積 | 42.3m ² |
| ⑨調査方法 | 試掘トレンチを入れ、その後全面に広げる。 |



第1図 荒神塚古墳の位置 (○印 1:50000)

⑩発見された遺物	縄文時代	土器(後期)
		石片
	弥生時代	土器(後期)
	古墳・奈良・平安	土師器
		須恵器
	中世	内耳土器
		磁器
	近世・近代	陶器・磁器
		銭

⑪整理の方法と基準

遺跡No. 31

注記No. 遺跡No.・調査回数・遺物取上げNo.・層位

遺構図 各遺構図中の略号は以下のものにした

S 石

報告書作成作業分担

遺構・遺物総体	山田 武文			
トレス	小倉明日香	小口まゆみ	清水 弘子	
上器鑑定	柳川 英司	山田 武文		
図版作成	山田 武文	小倉明日香	横内 友美	清水 弘子
本文執筆	山田 武文			

全体の編集・構成は山田がまとめた。



第2図 荒神塚周辺の遺跡(1:12000)

2. 遺跡の位置と環境

天竜川を遡ること216km、終に水口に至り、最上流部の一角にあたる川岸三沢地区天竜川右岸に荒神塚古墳はある。左岸は後背に渓山地があり、有賀岬や守屋山、杖突岬へと続く。右岸は川岸山地から小野岬、塙嶺岬へと連なる。この山地に挟まれたわずか200~300mの沖積地が、天竜川沿岸を作っている。後背山地は急斜面の



第3図 市内古墳分布位置図(1:20000)

山裾が天竜川に接し、深くV字形に削られた谷を背負う大小の扇状地および崖縦、さらに侵食から残された丘陵、尾根などが並んでいる。天竜川近くまで迫る山腹は一種の地峡のような谷となり、伊那谷に至るまで10kmほど続く。荒神塚古墳は、諏訪湖釜口から1.8kmほど下流の、一の沢川のつくる扇状地の先端に位置し、現在の天竜川岸からほんの10mほどである。市内成田町と三沢区との境付近にあたり、県道下諏訪辰野線の三沢地区に入ってしまう左にある。

天竜川は南下して遠州灘に注ぐが、縄文時代から交流が頻繁であったと考えられ、古代においても東海地方の諸平野を通じて先進地帯である畿内文化圏とも接し、パイプ役をなしていたと考えられる。そういう中において、荒神塚古墳が諏訪盆地の袋の口を押さえるような場所に位置していることは、その意義を暗示している。現在は周囲に工場が建ち並び往時の姿は見られないが、天竜川を望む景勝の地であったと思われる。近代岡谷の製糸業の中心地でもあった。

古墳周辺には数多くの各時代の遺跡が点在している。一の沢川の上流には、弥生時代後期の標識ともなった岡屋遺跡があり、さらに上流の開けた谷間には一の沢遺跡がある。古墳すぐ西には、諏訪に唯一とも言われた貝塚らしきものが発見された、縄文時代後期の熊野神社境内遺跡がある。同じく西方50mほどに塚の山古墳があったが、大正時代に工事により破壊されている。馬具を出土したとの伝えがある。一方対岸に月を移すと眼前に洩矢遺跡があり、荒神塚古墳と洩矢神社を結ぶ直線延長上には守屋山頂がある。洩矢遺跡と南の経塚遺跡は中央道の調査で平安時代の集落が確認されている。また、対岸東には炭化米の出土で、全国的に知られた橋原遺跡がある。国鉄の路線の変更に伴う調査において、多大な成果をあげ、弥生時代後期の解明に寄与している。諏訪湖釜口の周囲には、海戸遺跡、岡谷丸山遺跡、天王垣外遺跡、横道遺跡といった全国的にも名の知れた著名な遺跡が多い。

諏訪の玄関口であったこの地一帯は、縄文時代から現在に至るまで生活の場となってきた。交通の要衝として、重要な位置を占めてきたのである。

3. 古文書にみられる藤島神社(荒神塚古墳)

荒神塚古墳には、古くから藤島神社が祀られ、諏訪明神の入諏伝説が語られてきた。中世から近世に至る間に書かれた文書には、入諏に関する記述がみられる。荒神塚古墳と藤島神社が、一概に無関係とは限らず、古代諏訪を解明するに貴重な史料である。また、これらの記述は、調査記録のひとつとも考えられる。そこで、本項を設け、引用記載する。

文書は四点で、各冒頭に出典を明示する。

大祝信重解状 宝治三年(1249年)

--、守屋山麓御垂跡の事

右謹んで旧貫を検するに、当砌は昔は守屋大臣の所領也、大臣天降り御ふの刻、大臣は明神の移住を願ぎ奉り、制止の方法を勧し、明神は御敷地と為すべきの秘計を廻し、或は評論を致し或は合戦に及ぶの処、両方雌雄を決し難し、爰に明神は藤鎧持ち、大臣は鉄鎧を以て、此の処に懸けて之を引く、明神即ち藤鎧を似て軍陣の評論に

勝得せしめ給ふ、而る間守屋大臣を追罰せしめ、居所を当社にトして以米、遙に数百歳の星霜を送り、久しう我神の称誉を天下に施し給ふ、応跡の方々足新なり、明神彼の藤籬を似て当社の前に植えしめ給ふ、藤は技稟を栄え藤諏訪の森と号す、毎年二ヶ度の御神事之を勤む、爾より以来当部を似て諏訪と名く。(原漢文)

諏訪大明神絵詞祭記

抑コノ藤島ノ明神ト申ハ尊神垂跡ノ昔、洩矢ノ惡賊神居ヲサマタケントセシ時、洩矢ハ鉄輪ヲ持シテアラソヒ、明神ハ藤ノ枝ヲトリテ是ヲ伏シ給フ。ツイニ邪輪ヲ降シテ正法ヲ興ス、明神誓ヲ免テ藤枝ヲナケ給シカハ、則根ヲサシテ枝葉ヲサカヘ、花蕊アサヤカニシテ、戰場ノシルシヲ万代ニ残す、藤島ノ明神ト号スル此ユエナリ。

勝出正履 洲羽事跡考

天竜川を覆ひし藤の木の事

橋原村に鎮座する守屋大明神と川向なる何某の神中あしくおはせし、こなたの藤の木むかひなる藤の木とからみしきま、両神の争ひ給ひしやうに覺へしと古老のいふとなん、此守屋の神はしめは大明神を拒み給ひて後に服從給ひし神也、此藤まとひて川を覆ひし間、四五丁も川の水を見る事なかりしといふ、元和以来候命ありて伐らせ給ひしといふ。

松沢義章 豊幽本紀夏の部

又三沢村に藤島大明神の宮あり、又今の天竜川を隔てたる橋原村に守屋大明神と唱る宮あり、古は藤の大木此両社に在て、藤島社の藤は守屋社の方にはびこり、又守屋社の藤は藤島社のかたにはびこり、其両社は相去り隔る事凡五六丁はかりあるを、両社の藤中にて行きあひて、空中に藤の花もて造れる一つの大橋如くにて、藤の花盛りなる頃は奇しき観ものなりける趣、是亦絵詞の書に見えたり、然れども其両社の藤は其後如何になりけん今は見えずなれり。

内容は、藤島大明神(=諏訪大明神)が守屋の神(洩矢の神)と争ってこれを降ろし從えたとするもので、諏訪神を奉ずる集団(あるいは一族)が、諏訪に進出し移住したことを物語っている。

神武の東征においても、長彌彦が進入を拒み争ったとされている。先住民の侵入者への抵抗は当然であり、出雲の国譲りでも争っている。信重解状では、鉄と藤をもって引き合ったと記されていて、国引き壇神話の様相を示す。この型の神話は、日本のみでなく広く世界的にあり、また特定民族にあるというものではなく、世界的な共通神話のひとつである。この型は古く、信重解状が書かれた時には諏訪ではすでに一般民衆に知られていたのであろう。諏訪明神=神氏であり、入鏡の時期に関わりそうな内容である。

諏訪大明神絵詞祭記では、地主神である洩矢の神が悪賊とされ、藤の枝で打ち負かされたと説かれ、勤善懲惡型の仏教説話の形態が見られる。この絵巻は、1336年に小坂円忠によって撰述され、当時一流の画家や書家が参加している。古代の諏訪を知るための貴重な資料であるとともに、鎌倉時代から室町時代に移行する激動の時代背景があり、その点にも注目される。

藤島社には二説あり、前記二書では上社周辺の社としているが、洲羽事跡考では橋原村の洩矢社と対岸の社と、藤島社をしている。この二社から伸びた藤がからまつて、天竜川を覆っていたと書かれている。元和に高島藩主の命で伐木された。豊幽本紀夏の部でも、三沢村の藤島社の話で、絵詞にもそう書いてあると記している。時代の下った書物であるが、三澤村がこの伝説の舞台であるとしている

4. 荒神塚古墳の調査史

荒神塚古墳の調査は古く明治時代に遡る。この時の経緯と遺物の処置について、2度の届書が時の県令宛に提出されている。これらについては、「川岸村誌」および「岡谷市史」上巻に詳しいので、本報告書に関連する事項多々あることから、ここに抜粋再掲載しながら記述する。



(1) 明治14年の調査

明治初年の絵図によると、天童川と宮沢川という天童川に流れ込む小支流の合流点に広がる田の中に、大きな木のある小丸山が描かれている。これが荒神塚古墳であり、円墳である事を示している。

明治14年に2通の届出があり、そのうちの1通は次のような内容である。

(前略)今般村民川除堤防ヲ營ミ候ニ方リ、其ノ用石ヲ求メンガタメ古墳ヲ少シク掘リ候始、不圖其ノ一方ヲ掘リ開キタルニ、縱四間ノ窟横六尺アリ、深サ七尺許ニシテ周囲ハ堅固ナル石垣ヲ築キ、平石三枚ヲ以テ蓋トナシ、中ノ埋藏物等堀リ出シ候(後略)

堤防を造るために塚の石を取ろうとしたところ、石室に穴を開けたようである。原文からは幅1.8m、長さ7.2m、高さ2.1mという石室の規模が記されている。現在知られる市内の古墳のうちでも、7mを超える石室は、コウモリ塚、ウバガフトコロの2基だけで、最大級の石室の一つである。村誌では県道によって断ち切られた部分には石室の東側にあたる壁が残っているとし、石室の長軸を南北に推定している。

数ヵ月後に再度届出書が提出され、遺物の処理についての報告を行っている。以下報告を抜粋する。

(前略)今般、村民横内弥吉七外二名川除堤防ヲ營ミ候ニ当り、ソノ用石ヲ求メンガタメ右古墳ノ周囲ニ小石ノ礎石タルヲ見、少シク堀り取候所、古墳ノ方位ニ方リテ小穴アリ、之ヲ覗ヒ見ルニ一ノ窖ニシテ中ニ埋蔵物許多有之候ニ付、乃チ氏子中ニ告ゲ社掌ニ議リ掘出品ノ數及由緒相取調圖面相添ヘ、具ニ上申仕則チ御指揮ニヨリ、右発掘仕候物品ノ内、骨片ハ壺ニ納メ旧窖ニ埋蔵シ鍍金銅環其ノ他ノ器物ハ境内ノ社ヲ修繕シ之ニ納シ、永久保存致候様執行仕候(後略)

主に遺物の処置に重点があり、骨片は壺に入れて石室に戻したとされ、その他の遺物は社を修繕して納め、保存したとされる。さらに、発掘された遺物の目録が付されている。

(2) 出土した遺物(第14図)

遺物については、川岸村誌に詳細な所見がある。その部分は再掲載する。

・如図(図略)銅環、直径一寸周囲

(註)銅環は三個現存する。そのうち一個はほぼ全体にまた他の一つは半面に金箔が残り、残りの一つは殆んど剥げていた装身具の一種である。耳環であろう。

・如図(図略)管玉一個、長一寸色濃き緑

(註)後述するように勾玉が十個も現存するのに対して、管玉は一個しか発見されていない。濃緑色の碧玉製で、実長は二十八耗、の太型で、中心を片抉りの穴が貫通する。

・勾玉二個 長一寸二分色鉛色

・勾玉三個 長一寸色薄鉛色

・勾玉五個 長九分色薄鉛色 但シ一個色鼠色ニ類ス

(註)勾玉も記録通り十個現存する。実長は最大のもので四十二耗。最小のものは二十八耗である。目録の中、最後の鼠色のものが最小で、滑石を用い、形も均整のとれた美しいものである。その他は、すべて所謂鉛色の瑪瑙製、コノ字勾玉といわれるものである。形は不整形で磨きも一様でない。孔はすべて片抉りである。

玉類の中には右の外に記録中にはない、青色硝子製の小玉が一個ある。高さ九分長十耗の扁円形で小玉としては大型品に属する。

以上のような金銀鍍金銅環、コノ字勾玉、大型管玉、硝子製小玉に、荒神塚では発見されなかつたが、水晶製の切子玉を加えた装身具の一群は、古墳時代の極めて末期的な様相をもつものであるといわれている。

・古キ太刀、長二尺五寸巾一寸五分(図略)

(註)荒神塚発見太刀中最大のもので、第五十二回の完全に近いものをさすらしい。今次調査の際には相当

破損していた。刀身に全然反りのない直刀で、切先は弧状をなす所謂「ふくら切先」である点、次にあげる例と違っている。

- ・古キ太刀 長二尺巾一寸二分
- ・古キ太刀 長一尺六寸巾一寸 但ニツニ切断ス

(註)右の二例、及び後述の二例共に今は破損して、写真の上では実際にどれにあたるかは不明であるが、茎(ナカゴ・柄をさしむ部分)の数などから推すと実在したことは確からしい。いづれも直刀で、その切先は一直線となす。「鰐切先(カマスキッサキ)」である。(目録中の図では先のふくら切先とこの鰐切先との対比を特徴をよく表すように描かれている。) また後者の茎と刀部との境の「関(マチ)」の部分に角状の突起がある。

- ・古キ太刀 長一尺八寸巾一寸二分 但切先キ断ス目釘サシタルママ
- ・古キ太刀 長二尺巾一寸二分 但ニツニ切断ス 切先無シ

(註)この二本の太刀については取り立てて説明する事はない。切先こそ不明であるが、先の三例と同じ直刀である。一つ注意することは茎の部分に柄をとめる目釘が遺存した一例があることである。太刀の刀身のみが残っているのは、一部に見られるような金や銀その他の金属によって鞘や柄が装飾された豪華な太刀が、荒神塚にはなかったということを意味するのであって、こうした現象が古墳末期らしい刀装の特徴ともいわれている。

- ・如図(国略)鎌ノ鍔ト覺シキモノ一個 古キ鉄器

(註)鎌は劍、鍔(鍔=インヅキ)は槍や矛などの下部や太刀の柄頭を包んでいる一種の飾り金具ことである。鉄製で無骨な円頭柄頭である。長さ二、三寸もあるうか。

- ・如図(国界)鉄銅一個 長二寸五分巾二寸
- ・如図(国界)鉄銅一個 長一寸七分巾一寸

(註)後者は目録に図示されているものであろう。前者は全然不明で、今回の調査の時には両者とも見当たらなかった。図で見る限りでは両方とも無窓倒卵形といわれる簡素なものである。また後者は銅としては余りにも小さく、銅の補助金具である「切羽(セッパ)」ではないかと考えられる。

- ・(国略)長一寸五分巾一寸

(註)右の説明の上に、桃の尻のような形態のやはり銅の如き絵が描かれてある。その大きさや形から推定すると、明らかに切羽であると思われる。目録以外何のデータも現存しない。

- ・如図(国界)鉄器一個 長一寸五分巾一寸
- ・長サ巾共六分程

(註)ここにあげられた鉄器は二つとも、横断面が橢円形をなす円筒状のものである。太刀の柄頭につける装飾金具に対する、銅に近い柄の元にとりつける簡素な刀装具の一種であろう。

- ・如図(国界)鎌ト覺シキ物數十四本長五寸程ヨリ三寸許リノモノ
- ・如図(国界)鎌ト覺シキモノト鉄破片八十個

(註)今次調査の時にも鎌は相当数残存していた。いずれも鉄製で、今知る範囲では平根鎌と思われるものは、一本もなく、すべて尖頭鎌であった。その刃部の形態は片刃小爪というべきものが多かったように記憶する。先程すこしふれた平根鎌というのは、長い羽根をもった平坦形態の鎌のことと、射殺などという実践的な効果は少なく、荒神塚に圧倒的に多かった尖頭鎌とは対象的である。この両者の違いとか分布には特別な意義があるらしい。

・如図(図略)物ヲ始メトシテ鉄破片物數五十長三寸巾三分

(註)如図長三寸巾三分のものは札に似た形のものが描かれている。調査の際には見られなかった。諏訪史には桂甲小札(鎧のサネ)の発見が記されているが、これを指しているらしい。ここでは何とも断定できないが、ともかくも薄い鉄片の多かった点は注意されてよい。

・轡破片 五疋分

(註)轡が馬具として必要欠くべからざるものであることはいうまでもないが、諏訪地方の古墳では他の装飾的な馬具の副葬は稀としても、轡は例外なしに発見されている。こうした轡によって示された諏訪地方の馬匹文化を藤森栄一氏は轡文化の名で呼んだが、これは簡素な馬具で表徴された諏訪地方の末期古墳の特色を意味するものであろう。荒神塚からは五疋分の簡単な轡の外、鎧の革紐をつる鉄具付きの鉄鎖が発見されている。明らかに装飾金具と思われるものは次の葉形辻金具にすぎない。

・如図(図略)菱形金流シノモノ蓋釘四本打付アリ、長二寸三分横巾一寸二分程

(註)最近の調査の時には見られなかった。詳細は不明であるが、恐らくは馬具の辻金具であろうと思われる。

(註)記録には洩れているが青銅製鍛金の痕跡のある注意すべき金具がある。厚さ0.8枚位の薄いハート形の鋼版が一枚、重り合ってつながっており、その裏面に瘤状の附加物がある。恐らくは何かの装飾金具として付属していたものとの接触の痕跡を示すものであろう。またこの金具について興味ある点は、その上部にあたる中心部に忍冬唐草文様をモチーフした様な透文があることである。いうまでもなくその文様は遠くギリシャに祖源をもち、仏教文化と共に日本にもたらされ法隆寺はじめ多くの寺院、器物に盛用されたものである。勿論、荒神塚の一例をもつてにわかにそうした一連の関係に結びつけることは、許し難いが、部分的な断片としか考えられないこの金具の形が、諏訪明神の紋を思わせるというだけの理由から、血縁関係を云々するような頗つた觀方よりは、確かに根拠もあるように思われる。いずれにせよ詳細は分らない。

・土器破片六個 但シ形不分明ノ器物

(註)詳細は全然わからないが須恵器破片である事は間違いない。

・如図(図略) 物一個白鼠長五寸口巾三寸五分底巾三分

(註)完全な鹿(ハソウ)である。この例のような朝顔型の口頭部以上が巨大に開いたものは余り知られていない。胸部と頸部にヘラで刻んだような斜線の簡単な文様が帯状に施されている。表面はザラザラしていて焼きもつくりも非常に悪い。

・如図(図略) 形ノ土器一個白色ニシテ処々ニ緑色アリ、直徑五寸周囲

(註)記録あるだけの資料で詳細はすべて不明であるが、図によると横糞であると思われる。周囲三寸位の頸があり、胴上部に穴がある。白色で処々緑色ありというのは、灰釉、又は自然釉が吹きだしたものですでに焼きは陶質に近くなつてることを示すものであろう。

・如図(図略) 形ノ土器一個白色直徑五寸

(註)提瓶である。全体に相当な厚さがあり、頸部は抜け不明。肩の一方に環状の把手があり横脇部に列点状の文様が見える。横糞や提瓶には横脇部に同心円状の繩文のあるものが多いたが、この列点状の文様もそれの一部であろう。白色という色調の叙述は前記横糞との同時性を物語るものであろう。

・如図 土器一個但シハツニ破レツシタモノ四寸図面 色黑色破レツシタルトコロヲ見ルニ土器ナリ

(註)記録にあるのみで詳細不明。表面に鼓目のある比較的薄手の須恵器の一部のことであろうと思われる。図によると短い頸をもった球状の壺のようである。

(3) 県道拡幅工事と石室の除去

昭和9年に県道の拡幅工事が行われた。この時に石室は壊されているが、社も移転したのである。保管されていた遺物は、写真を撮り石室の大石に方形の穴を穿って納藏し、上から重り石をもって蓋をして、昭和26年の再調査まで眠りについたのである。

(4) 川岸村誌編纂の調査

昭和26年2月、村史編纂のために遺物が再調査された。昭和9年に行われた保存は不備があり、遺物は大部分破壊されて、特に鉄製品は流入した雨水によって多くが酸化溶解していた。

村誌の中に調査結果をもとに荒神塚古墳について記述した部分がある。荒神塚古墳が諏訪地方の古墳がもつ一般的特性の中で理解され、最末期の群小古墳の典型的な姿であるとしたあとに、次のように記している。

全般に遺物の発見される量が少ない諏訪地方の古墳群の中にあって、二・三特殊な遺物が発見されたとしても、それは古墳の特殊な性格を直接に反映するものではない。例えば荒神塚からは心臓型をした銅製飾金具や諏訪地方で二・三の例しかない桂甲小札などが発見されているが、太刀、馬具、鐵などの最も一般的な副葬品によつて表徴される「馬にまたがった武人」という当時の支配者に対する基本的映像は少しも変りはない。稀に発見される特異な遺物は、そうした武人の富の程度のとるに足らないニュアンスを表すものに他ならないのである。私達はそうした未梢的な問題に拘泥するよりも、何十貫もあるような大きな石を組み合せた墓に、当時の川岸村全部の経済力をしても追いつかないような副葬品を入れて、権威を表わそうとした個人と、この時期になってまだ穴倉のような住居に石器までも使って苦しい生活をつづけた大衆とのあまりにもはなはだしい差はどうして生まれたのであろうかという、重要な課題の解決を先ず必要とされるであろう。

少數の富める者と、大多数の貧しい人々という構図はいつどのように発生してきたかに着目し、当時の社会の解明を模索している。後章で、繩文時代における血縁結合を基とした共同社会が、弥生時代を経て、いかに荒神塚古墳に象徴される支配階級が生まれてきたかを解明しようとしている。

遺物は調査後に、もとの盒に戻し、上にコンクリートで蓋をして、永久保存の処置をした。

(5) 岡谷市史の編纂と調査

市史編纂においては、明治14年の届書および昭和26年の川岸村誌の実見による結果を引用しながらまとめている。さらに荒神塚古墳の年代的考察にも及び、桐原健氏¹⁰、宮坂光昭氏¹¹の説を引用し、古代社会との関連付けを考慮しつつ記述をしている。むろん荒神塚古墳のみで時代社会を検討するのは困難であり、市内に点在する他の古墳や集落との関係で論考を進めており、古代岡谷の姿を解き明かしている。

(6) 遺物の保存強化処理

昭和60年には、収蔵盒に保管されていた荒神塚古墳の遺物が、岡谷市に寄贈され、昭和26年以来34年ぶりに開口された。祠下の収蔵盒はコンクリートで蓋をされ、堅固に封されていた。中には、馬具、勾玉などが甕に入れられ、直刀・馬具や土器片が周囲に納められていた。

鉄製品は川岸村誌編纂の再調査時よりさらに溶解して、鉄剣はボロボロにあるいは崩壊して、取り上げも不可能な状態であった。そのため、教育委員会では昭和63年・平成元年度にわたって国庫補助事業の防錆処理を行

つている。

現在、荒神塚古墳の遺物は、岡谷市立美術・考古館において、展示収蔵されている。現存するものは、勾玉7点、管玉1点、硝子小玉1点、飾り金具1点、璐1点、提瓶1点、横瓶1点、直刀1点、柄頭?1点、轡の部分では、引手9本、素環鏡板と引手または噴の結合したもの4点、素環鏡板と引手・噴の結合したもの1点、鍔の吊り鎖1点、その他にこれらの破片が多量にある。

参考文献

※ 藤森栄一他 「川岸村誌」1953 川岸村

※※戸沢充則他 「岡谷市史 上巻」1973 岡谷市

5. 平成15年度トレンチ調査および主体調査区調査

(1) 1トレンチおよび主体調査区(本区)の調査

調査に先立ち、境内のケヤキおよび藤の切り払いが完了し、藤島社の祠および台座の石垣も撤去された。この台座の石垣や祠の台座に使用されていた石のなかで1mを超える大石は、古墳に使用されていたと思われ、中央に遺物保管用に方形の室をあけられた石は天井石であったと考えられる。

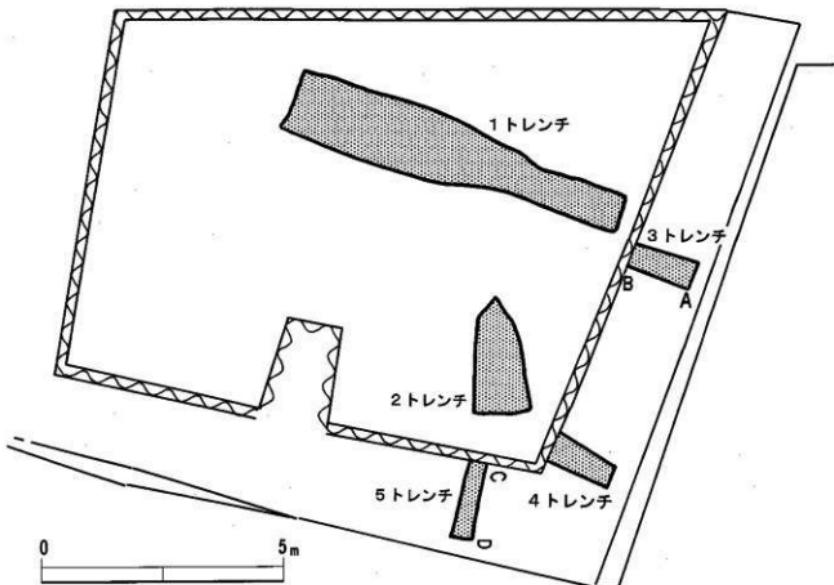
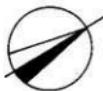
調査は古い記述をもとに東西にトレンチを入れて石室を探すことから開始した。(第5図) 昭和9年の拡幅時に東側壁が残されたとの伝えから、祠台座石垣から東西方向にトレンチを入れて調査を開始した。台座下では、祠の石垣の基盤とした、方形に大石が配されていた。これを除去し掘り進めると、下部はフカフカの軟らかい土で、中に人頭大の石がガラガラと放り込まれたかのように無秩序にあり、層中からはガラス片や陶磁器片また針金などが出土している。寛永通宝を最古として、現代までの硬貨も出土した。地表下1mほど掘り下げたところでトレンチ東側では人頭大の礫はみられないが、西側ではあいかわらず石がゴロゴロ出てきて、中には四半石もみられるなど、近代の埋土と考えられた。どちらからも、近代のガラスや陶磁器の破片が出土していた。地表下1.2mに達しようかという所で、白色や灰黄色の粒子を含む黒褐色土層に変わった。この層はしまりがあり堅く、この時はこれが古墳の構築面であるかもしれないと考えられた。1トレンチでは石室の残存らしき様子はなく、構築面と捉えられた面も部分的であるため拡張することとし、天竜川側および西側へと広げた。県道側および東側については、地表にかなり大きな石がたくさんあり人力で動かせないため、後にまわした。

天竜川側も西側も1トレンチと同様の状態であり、層中に大きな石や陶磁器片などが出土していた。西南部に電柱の支線の埋め込み穴があり、これを先に掘って状況を見た。穴はかなりの深さで地表下150cmに達し、底に黄色の土が見られた。この間はやはり軟らかめの土が壁にみられ、1トレンチと状況は変わらなかった。拡張部分を全面に掘り下げていく中で、東側のケヤキの切株際に地表下30cmで蓋石を伴う甕が出土した。この甕に関しては別項を設ける。

1トレンチでしまった堅い黒褐色土がみられていたため、拡張部分においてもこの土を目安に掘り進めた。南壁では、赤褐色の砂質の堅い面を地表下1mで検出し、西に傾斜していた。この時点ではこの面が埴丘面かと考えられた。県道側は大小の穴によって切られ、この穴の中からも近代の磁器片が出土していた。これらの穴は、

浅い中華なべ状で、遺物の出土もなく、昔の地表の雨だまりのようであった。(第6図) 穴は灰白色～赤黄褐色の疊混入の地山を掘り込んでいた。この赤黄褐色土層は、1トレンチで填丘構築と考えられた黒褐色土の下へ続いている、拡張部分ではこの黒褐色土が消えて赤黄褐色土となる。

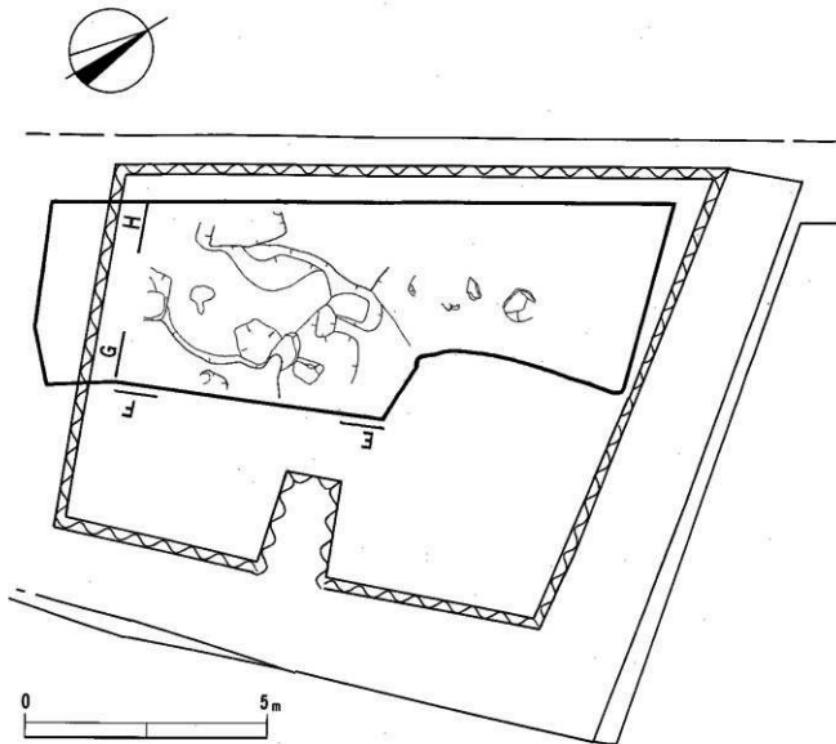
また、県道側へ上り傾斜となり状況は何となく傾斜変換点が円形に巡るようにもみられた。南壁際でみられた赤褐色土は、厚さなどを見るため精査していたところ、層下部から近代の磁器片が出土したため、古墳構築土でなかった。この層を掘り下けたところ、地山上に若干浮いた状態の大石が、南へ傾斜をもって検出された。おそらく古墳石室に使用されていた石と考えられるが、傾斜面にズリ落ちているような状況であり、石室の残存とは考えられない状況であった。南側および西側への拡張においても、石室や填丘の痕跡はなく、地山上まで近代



第5図 荒神塚古墳 トレンチ設定図(1:100)

の磁器片が出土する土層が堆積していた。ただ何らかの傾斜面であったことは疑いなく、セクションの説明でも述べるが、傾斜堆積といった状況がよくわかる。下部ではつぶ貝の層がみられるが、周辺の方々の話からはつぶ貝をここでもいて貝殻を捨てていたようで、戰後まで行われていたとのことであった。

南側と西側への拡張に遅れて、東側へも拡張をし、ケヤキの根の県道側を掘り下げた。上部ではわずかな近代陶磁器が出土したが、量は少なく、下部に掘り進むに従ってほとんど遺物が見られなくなっていた。土はフカフカと軟らかいものでかなり乾いていて、少々の水ははじいてしまうほどであった。途中には小礫が混入する層も厚さ30~50cmほど見られているが、この層中からも、ガラス片などが出土している。灰白色などの粒子を含む堅い黒褐色土が下にあり、この層で一旦全面に広げてみた。道路側に大石が数個見られたが、組まれて積まれ

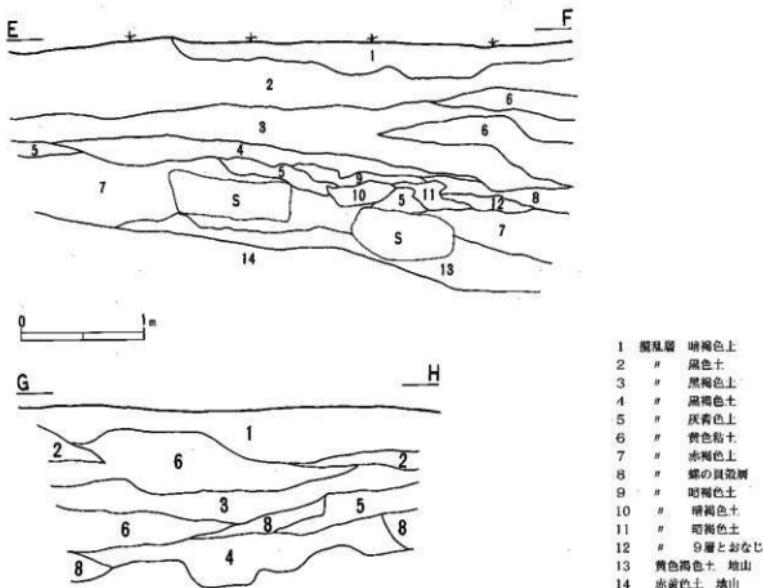


第6図 荒神塚古墳 損乱穴実測図(1:100)

た状況ではなく、道路側の石垣の裏込土の上に乗っているものもあり、明らかに石室の残存とは考えられない状況であった。

古い記述の中に、石室の石が石垣に残っている旨があるが、これは石室そのものを残したというのではなく、石室に使われていた石を使用して残したという意味であろうと思われる。拡張区においても、石室の残存はみられないために、石垣際まで広げてみるとこととし、大石が石室そのものの残存でないため、これを排除して作業を進めた。

県道側石垣は、わずかな傾斜があるがほぼ直に築かれて、その裏30cm～50cmは構築の裏込が見られる。上部は近代の所産であるため石垣も半分一緒に除去した。この状態から掘り進めたところ、30cmで地山の赤黄褐色土となった。この赤黄褐色土上の黒褐色土中に、遺物は少ないが縄文時代の土器片が出土した点異質である。縄文時代～弥生・平安～中世の遺物が出土しているが、ほとんど近代の陶磁器やガラス片との混在で、時代ごとの包含層がみられなかつたが、黒褐色土の縄文後期の包含層が明確に捉えられている。ここに縄文後期の集落があつたとは考えにくいか、北西に熊野神社境内遺跡があり、その遺物である可能性が高い。



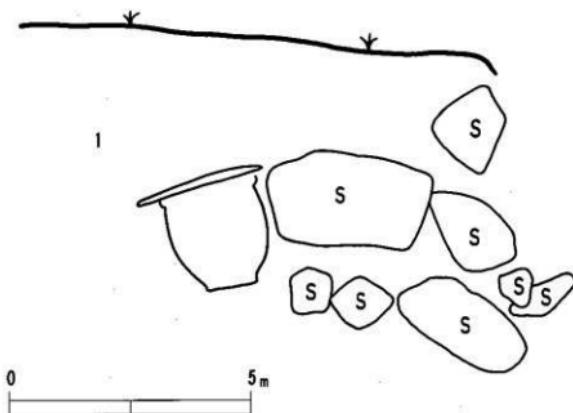
第7図 荒神塚古墳 本区南壁および西壁セクション(1:40)

道路側においても赤黄褐色土で全面検出をし、石垣壁にサブトレンチで深堀りをかけたが、下方約50cmまで同じ層が続き、この層が地山であることを確認した。全面を観察すると、北東側が高く、西～南方向にかけてドリ傾斜となっていて、中央に傾斜変換点がみられるなどから墳丘裾部分であろう。西側ではかなりの勾配で落ち込み、周溝とも考えられるが明らかでない。(第9図)

この溝は幅広いが、溝の底面あたりに北～南方向に並べられた石があり、近代の用水路とも考えられ、配石の中からも近代の磁器片やガラス片が出土している。そのため明確に古墳の周溝と言いくつ切れないところがある。この裾らしき部分は、後述する6トレンチ調査でもわずかに見られ、周溝を後世水路に利用したとも考えられよう。また、北側が高く丘状になるのは、墳丘の一部が残存していると考えられ、石室が南一北に長軸を持つという記述にも合致する。石室の残存は残念ながら検出できなかったが、墳丘のわずかな残存が確定できたと考えられる。(第10図)

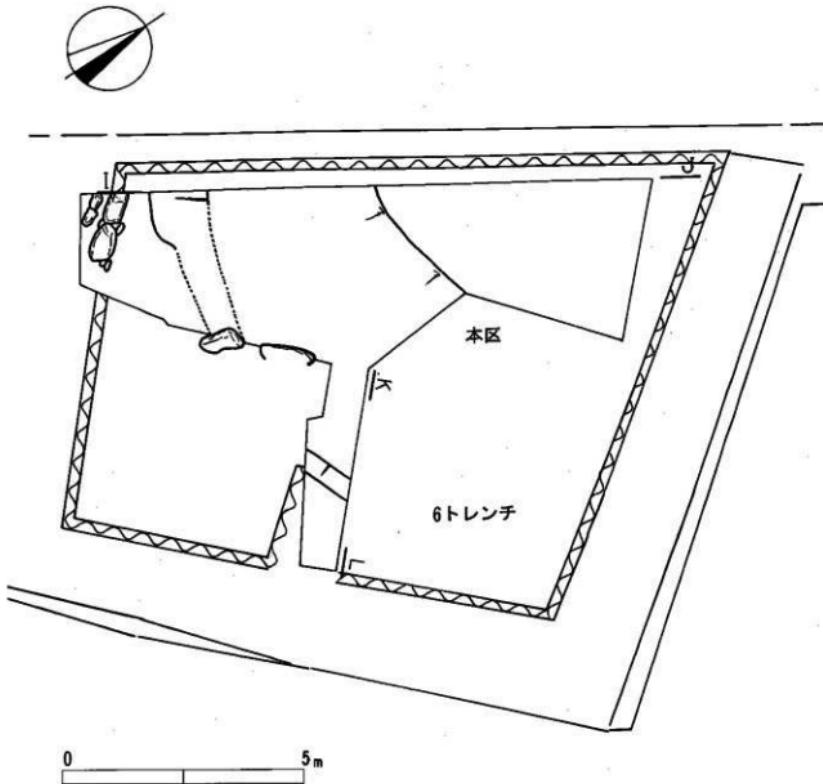
(2) 本区南壁(天竜川側)および西壁(辰野側)セクション(第7図)

南壁および西壁セクションにみられる上層は、ほとんどが近代の埋土ないしは盛土である。1層～14層まで分層を行っているが、1層～12層中からは、近代の陶磁器、硬貨、ガラス片などが出土した。平面的にみると放射状に傾斜し、県道側の北部分を頂点とした小高い丘状を呈している。その傾斜に人为的に土が埋め込まれた様子が、3層、6層、7層、8層等に顕著にみられた。7層内に見られる右の傾きも下の13・14層といった地山の



第8図 骨の入った甕出土状態実測図(1:10)

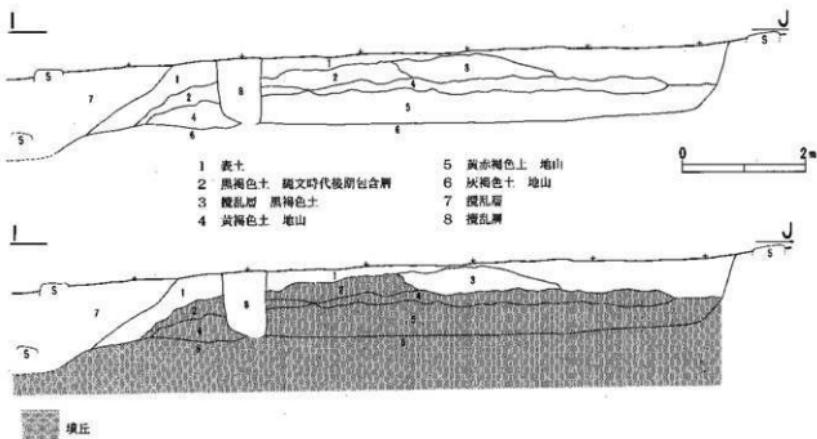
傾斜にはほぼ合致しており、石室の礫がここに押し出されてきている。西壁の分層も、ほとんどの層が近代の埋土であるが、南側への傾斜面に持ち込まれたため、北側が高いこともあって、両側から埋土が交互に重なり合っていた。これは、埋土が西側から順次行われたか、またはここが溝状・谷状であったためと考えられる。地山と見られる赤黄褐色土と、県道側にみられた粒子を含む黒褐色土は、墳丘塗の残存と考えられる。



第9図 荒神塚古墳 本区完堀実測図(1:100)

(3) 本区北壁(県道側)セクション(第10図)

地表下2m近い近代の埋土がみられる南側に対して、県道側の土層堆積は地山まで60cmと浅く、さらに2層、4層は墳丘構築時の土層と考えられる点で、荒神塚古墳の名残のある部分である。



第10図 荒神塚古墳 本区北壁セクション図、墳丘想定図(1:80)

表土である1層は黒色土で、層中から近代の陶磁器片やガラス片などが出土地した。2層は黒褐色土で、風化岩の小粒子を含有し、縄文時代後期の土器片が出土。この層は縄文時代後期の単一の包含層であった。下部に遺構は見られず、西南に熊野神社境内遺跡があり、流出した遺物ではないかと考える。4層～6層は地山と考えられ、黄色～赤褐色の色調を呈し、礫を混入し、堅くしまっていた。西側では2層が傾斜をしていてその上に1層と7層が乗り、この両層には近代の諸遺物が出土した。2層の東に3層が見られ、3層からは近代の諸遺物の出土があった。2層から、東西それぞれの端部方向に傾斜が見られ、若干の不整合はみられるが、円墳の断面状況を表していた。3層部分は石室があった部分かとも考えられるが、現状ではわずかな堅穴状の残存で、石室の痕跡を示す石積みは見られない。

(4) 骨の入った甕の出土状況について

本区ケヤキの根のすぐ西側に出土した。当初調査区壁であったところで、ケヤキの根が張っていて、甕上部には多くの根がからみ合っていた。壁清掃を行っている時に出土したもので、地表下30cmにあった。周囲には大小の石が詰め込まれて、甕を保護しているとは考えられない状態であった。甕は鉄平石の蓋がされていて、土圧のためかわずかに傾いていた。蓋に使用されている鉄平石は、縁辺を打ち欠いて梢円形に成形されている。甕は、口径20cm、高さ20cmの陶器で、茶色の釉薬がかかっている。中には、細片になった骨が底にわずかに残っていた。灰褐色がかかっていて、部位は特定できない。

明治14年の記述の中では、骨があったので甕に入れて、元の石室内に戻したと書かれている。明らかに石室内出土でなく、周囲の状況も埋設のための施設とはいえない。昭和19年の県道拡幅時に、石室内にあったものを、ここに埋設し直したと考えられる。このことは、石室の残存が一部分でもあればそこに納めたであろう骨の入った甕が、まったく別の場所に埋められているということで、石室が残らないほど拡幅による破壊に遭ったと考えられないだろうか。

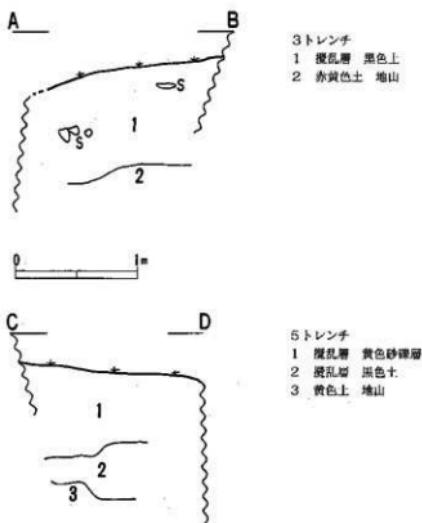
(5) 3・5トレンチの調査

3トレンチ

調査区東側の一段低くなったテラス状の外辺に設定した。地表から黒褐色土層となり、層中に小礫を混入していた。中から近代の陶磁器片が出土していることから、埋土と考えられる。ほぼ90cmの深さがあり、下は赤黄褐色土であった。これは地山と考えられる層で、礫が混入する。上の石段は5段積みで、工場との境となる石垣（下の石段）の上端は、上の石垣の中位になる。これは、上の石垣は最初から半分ほど埋まつた状態であったと考えられる。2層は東側に若干の傾斜をもち、途中で傾斜が変わる。これが墳丘の裾ではないかと思われる。（第11図）

5トレンチ

調査区大竜川側の一段低いテラスに設定した。1層は黄色の砂礫層で、3トレンチとは異なっている。この層中からは近代の陶磁器片やガラス片が出土しているので埋土と考えられる。1層は約90cmの厚さがあり、下に2層黒色土がある。第2層にも陶片が見られ、近代の所産である。下の石垣の裏に2層が入り込み、下部の3層は石垣構築により削られていた。その3層は黄褐色土で礫を混入する地山である。



第11図 荒神塚古墳 3・5トレンチ セクション図(1:40)

(6) 6トレンチの調査

本区のほぼ中央から参道にかけて、トレンチを入れ調査を行った。地表面から手掘りで進めたため、参道石段を除去しながらの掘り下げとなつた。（第9図）

参道石段と天竜川側を参道下、石段より北西側(県道側)を参道上とし、掘り下げを進めていった。参道下においては、石垣や石段を構築した時の埋土(1層)中から多量の近代の陶磁器が出土した。参道上は2層で近代の磁器片が3片出土したのみである。1・2層ともに横乱層であり、参道構築時の埋土であった。参道下の1層を掘り進むうちに1層最下部に平石が据えられて、石段より約40cm低かった。この石がいつ据えられたかは明確ではないが、下部の3層や5層からも近代の陶磁器が出土していく、それほど古い構築ではない。1・2・3層を掘り下げるに、参道上でこぶし大までの礫が多量に見られるようになり、この礫面を精査したところ、トレンチ内にほぼ全面に見られた。やわらかな黒色土で、層中から近代の磁器片や土管などが出土し、明らかに近代の埋土であった。

県道側端には石臼破片が出土した。参道下では3層中に、締まって堅い粘土層がみられ(4層)、当初は古墳の構築跡かと思われたが、天竜川側では3層にあり、参道構築時の基盤と考えられる。5層を掘り下げるに下は赤黄褐色を呈する締まって堅い層となった。

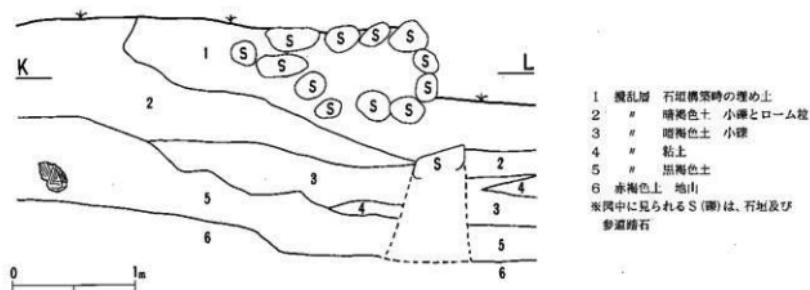
この層は本区でも見られ、地山である。この地山直上からも、ガラス片や磁器片が出土して、地山上はすべて埋土(盛り土)である。

6層は、県道側から天竜川に向って下り傾斜となり、中央に段差がある。わずかではあるが、全体を俯瞰した時に、本区の西側の傾斜面がこれに続くと思われ、墳丘の裾ではないかと考える。天竜川側にある工場の敷地レベルから、この地山の高さを測ると1mほど高く、この分削られている。

(7) 6トレンチ東壁セクション(第12図)

6トレンチ東壁は、北西から南東方向の土層堆積である。参道東石垣を残す状態でトレンチを掘り下げた。上部右側に見られる石は、すべて石垣または石段に使用されていた石であった。右中位にみられる石は参道石段の最下部にある石で、現況ではこの上に1層が覆っていて他の石段より一段低く、明治期の石段とも考えられる。

1層は石垣・参道石段構築時の埋土である。2・3層は暗褐色土で小礫を含み、層中に近代の磁器片の出土が見られたことから、埋め土(盛り土)である。4層は締まりのある堅い粘土で、藤島社参道の構築基盤であった可能性が高い。右側では3層中に4層があり、近代の構築と思われる。



第12図 荒神塚古墳 6トレンチ 東壁セクション図(1:40)

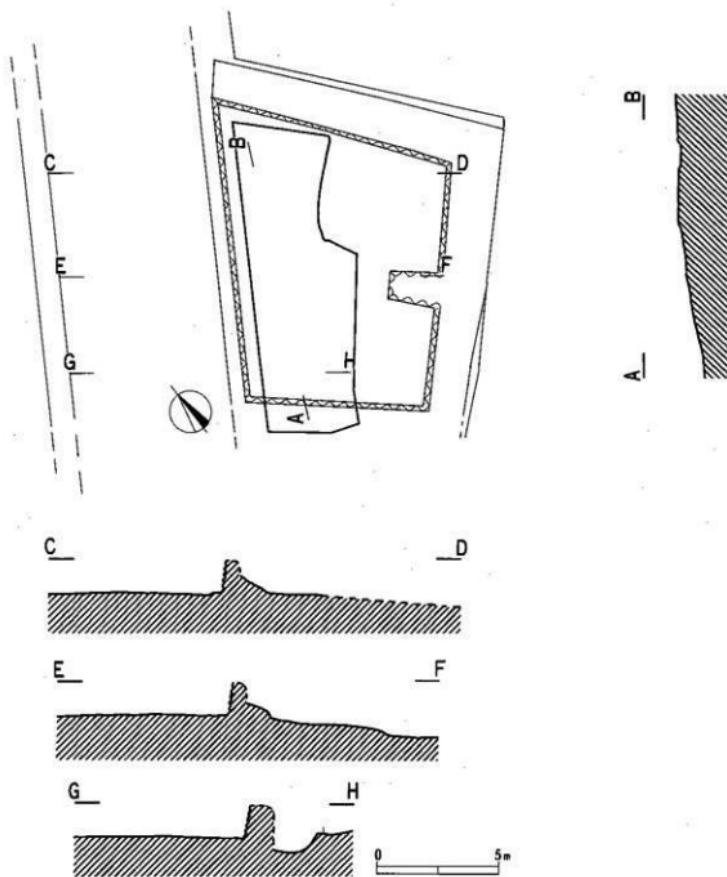
5層は黒褐色を呈する土層で、大小の礫を多量に含み、下敷きにグリを入れて基面を構築しているようである。

層中から石臼破片が出土し、陶磁器の出土もあるなど、この層も後世の所産と考えられる。

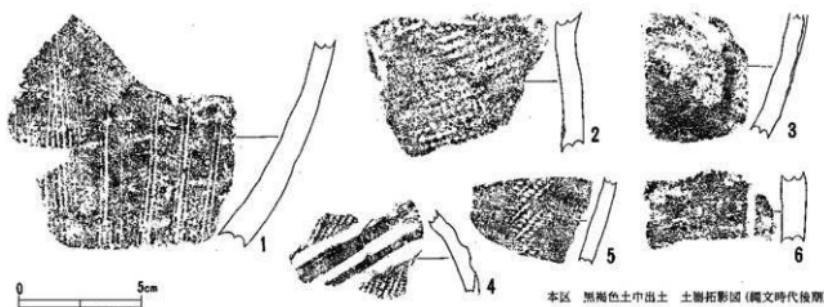
6層は、赤褐色土で礫を混入する。調査本区で見られている、黄褐色土や赤褐色土と同じ層で、地山である。

天竜川方向に下り傾斜していて、中央部分で段差があった。

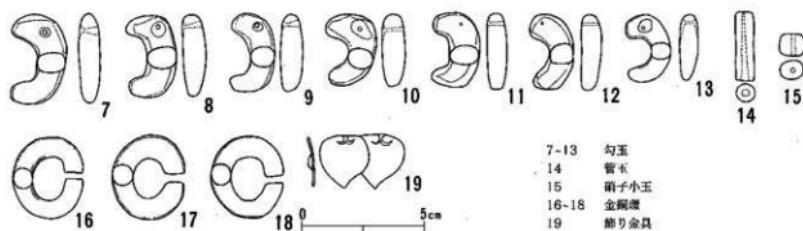
この段差が古墳に伴う裾部分の段差であろうと考えられる。



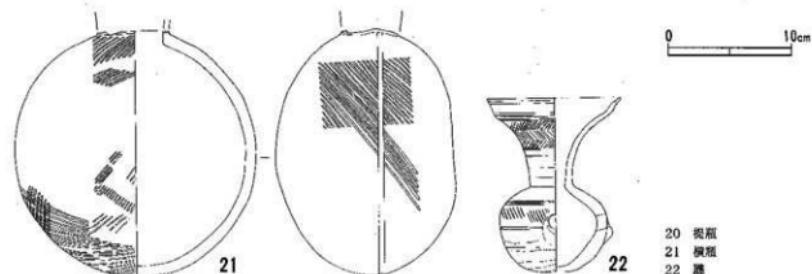
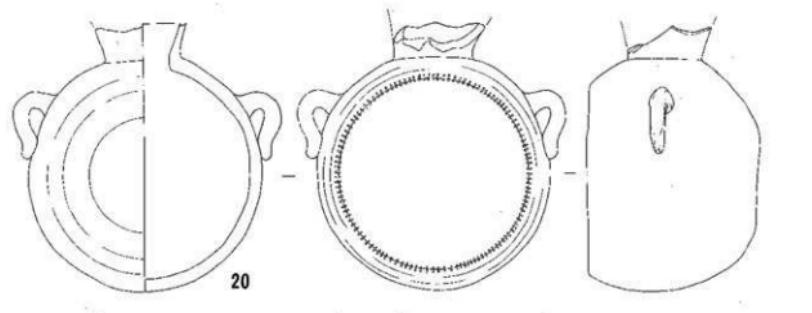
第13図 荒神塚古墳 エレベーション図(1:200)



本区 黑褐色土中出土 土器拓影图 (商文时代後期)



7-13 勾玉
14 管状
15 环子小玉
16-18 金綱織
19 銀刀金具



第14図 荒神塚古墳 出土遺物実測図

6. まとめ

今回の発掘調査において、主体である石室の検出には至らなかった。昭和9年の県道拡幅時に石室の石を石垣に残したといえが残されていたが、石は特定できるが、すでに石垣が積まれている中にあること自体、そこが石室でないことを示唆している。北東部の地表に露出していた石も石垣に使われはしなかったが、明らかに排除された状況であった。

藤島社の祠の基壇に古墳の天井石が使用されていて、藤島社も移築していることが明らかである。本区調査の項で述べたように、祠の下は2mに近い埋土(盛り土)となっていて、中から近代・近世の諸遺物の出土があつた。埋没していた石も、並べ、配され、積まれたという状況でなく、放り込まれた状態で、無秩序に重なり合っていた。重なり合う石の中には四半石があり、石室に使用された石以外もここに捨て込まれている。

北側部分に期待があったのだが、掘り下げた結果、石は存在するが、石室石積み状態とは考えられない。本区南壁最下部に見られた石のように、縁辺の傾斜面へ放り出されたものである。

以上を考えると、石室は県道上にあり、昭和9年の拡幅により消滅してしまったと考える。明治14年の届出だけが石室を知る唯一の資料となってしまった。

墳丘については、県道側の北壁土層堆積にその痕跡がみられた。2層とした绳文時代後期の包含層は、他の遺物を出土しない点で單一層である。古墳構築時にすでにあった層で、攪乱されていない。墳丘を形成していた土の一部である。

辰野側は墳丘裾部分が残り、急斜面の下り勾配となる。この裾縁辺部は3トレンチと6トレンチでも確認されているので、墳丘の想定ができる。裾の周りには周溝らしき溝があつたが、近代の水路が作られていて確定できなかつた。この溝は道路面より低いところにあることから、県道下に残存している可能性が高い。今後県道下を掘る機会があれば調査が必要である。

- ① 明治14年に墳丘の石を採取している時に石室が発見され、副葬品の調査をして、社殿へ納められた。
- ② 昭和9年に、県道拡幅工事が行われた。この時石室はすべて壊され、使用されていた石を現在の荒神塚古墳のところに捨てた。墳丘の土も一緒に捨てられて、墳丘裾であった部分の上に盛土されたと考える。そこに、石室天井石で基壇を造り、台座石壇を積んで祠を移築したのであろうか。
- ③ 昭和26年に、川岸村誌刊行のため遺物調査が行われ、遺物の永久保存のため、天井石であった石に盒を作り密封した。
- ④ 昭和60年に、遺物を市に移管するため盒を開けて、遺物を取り出した。

結論として、昭和9年の県道拡幅工事は石室を完全に取り除いてしまった。そのために今回の調査では、石室はおろか痕跡すら検出できなかつたのである。



調査前全景



祠 立木撤去後全景



1トレンチ



本区 石 検出状態



骨の入った壺出土状態



本区 地面検出



本区南壁(天竜川側)セクション



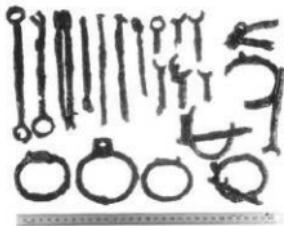
本区および6トレンチ完掘状態



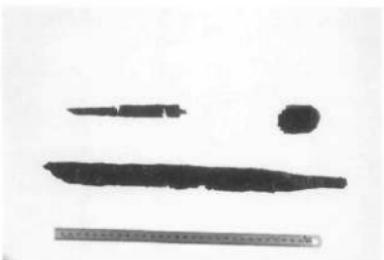
本区北壁(県道側)セクション



6トレンチ東壁セクション



荒神塚古墳出土馬具(櫛)



荒神塚出土鉄製品(直刀、刀子、円頭柄頭)

報告書抄録

ふりがな	こうじんづかこふん							
書名	荒神塚古墳							
副書名	一平成15・16年度国補緊急地方道路整備(街路)事業に伴う荒神塚古墳発掘調査報告書-							
卷次								
シリーズ名	郷土の文化財							
シリーズ番号	25							
編著者名	長野県岡谷市教育委員会							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1				TEL0266-23-4811			
発行年月日	西暦2005年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
こうじんづかこふん 荒神塚古墳	ながのけん 長野県 おかやし 岡谷市 かわざし 川岸	20204	31	36° 3'	138° 2' 00"	20031201 ~ 20040310	42.3	県道拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物				特記事項
荒神塚古墳	古墳			縄文時代後期土器片 古墳時代後期土器片 奈良・平安時代土師器片・須恵器片 中世 内耳土器片・磁器片				

郷土の文化財 25
KOJINZUKA KOHUN

荒 神 塚 古 墳

発行日 平成17年3月15日

編集 岡谷市教育委員会
生涯学習課分室
〒394-0021 長野県岡谷市本町3-1-49
TEL0266(23)8112

発行 岡谷市教育委員会
〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1
TEL0266(23)4811

印刷
製本 株式会社 エース企画
〒394-0081 長野県岡谷市長地桜現町1-1-50
TEL0266(28)5411

